# みずき書林

『秘蔵写真 200 枚でたどるアジア・太平洋戦』
記事掲載

みる




井上祐子編著『秘蔵写真200枚でたどるアジア・太平洋戦争』

第２次大戦中、陸軍参謀本部の意向で設立され、対外宣伝グラフ誌『FRONT』の制作を担った「東方社」。写真家の木村伊兵衛や濱谷浩ら戦後も活躍する人材が参加した。残された約２万点のネガから200点の写真を掲載する。

国内、東南アジア、中国の３部立て。前線の写真はほぼなく、被写体は宣伝向きのりりしい軍や銃後を前向きに生きる人々。占領地や留学生の姿からは「見せたい日本」が端的に浮かぶ。一方、国内の様子に総動員態勢への変化もうかがえ興味深い。（小川雪）

▽みずき書林・3672円

朝日新聞読書面　８月４日付

---

日本経済新聞　2018年（平成30年）

文化

# 東方社 アジアの変動写す

◇旧日本軍傘下の機関が撮影 戦時下の写真を調査◇

井上祐子

旧日本陸軍参謀本部の宣伝機関として1941年春に設立された出版社「東方社」。私は同社所属のカメラマンが戦時下の日本や中国、東南アジアで撮った写真約2万枚のネガを整理し、調査する仕事に携わってきた。

□□□

**眠っていたネガ**

東京大空襲のちょうど1年前、44年3月10日の陸軍記念日パレードに集う群衆。兵器工場で軽機関銃を組み立てる女性。ぎこちない姿勢で竹槍訓練をするフィリピンの男性たち。様々な民族の青年が訓練所で相撲を取るシンガポールの風景。連合国軍による香港空襲で破壊された街と傷つき倒れた人々――。

そもそもが陸軍傘下の組織が撮ったプロパガンダ写真なので、被写体にポーズを要求したであろう構図も多い。そうした点を割り引いたとしても、東方社の写真には、旧日本軍がアジア各地の社会にもたらした変動が焼き付けられている。

同社の後継団体の旧社屋（東京・文京）に眠っていたネガが再び日の目を見たのは20

シンガポール「興亜学院」での相撲風景（1944年、林 重男撮影）

10年。公益財団法人政治経済研究所（同・江東）にまとめて寄贈されることになったのがきっかけだ。その際、近現代の視覚メディア史を専門とする私に「調査メンバーに加わらないか」と声がかかった。

東方社は英語、中国語など多言語に翻訳したグラフ誌「FRONT」を42年2月に創刊。クローズアップやモンタージュなど写真を巧みに使い、当時の日本が唱えた「大東亜共栄圏」の理念を伝えようとするプロパガンダ誌だった。創刊号「海軍号」に続き「陸軍号」「満州国建設号」「フィリピン号」など計9冊を終戦までに刊行した。

組織運営や雑誌製作には写真家の木村伊兵衛、デザイナーの原弘、評論家の林達夫ら戦後日本の文芸・芸術界を代表する人物が関わっていた。この人物のため東方社に関心を寄せる人は多く「FRONT」の解読を軸に研究が進んできた。だが、写真のネガが大量に見つか

り、整理、解読されたのは今回が初めてだ。

□□□

**経緯など細部まで**

主に35ミリフィルムで撮られたネガはホルダーやファイルに入っていた。記号番号は振ってあるが、撮影場所や撮影者などの情報はあったりなかったり。写真画像だけでは信頼に足る史料とはいえない。撮影時期、被写体、撮影に至る経緯など、情報がそろうほど史料としての価値は増すから、その調査が重要になる。

例えば、東方社カメラマンの関口満紀が44年10月に北京で撮った「新民青少年団総検閲大会」は、中央で行進する幹部らしい大柄の人物がなかなか特定できなかった。日本の新聞社が中国大陸で発行していた版の小さな顔写真を頼りに、彼が新民青少年団副統監の喩熙傑という人物だと確認できた。こうした中国における対日協力団体の実態はあまり知られておらず、細部まで調べる意義は大きい。

占領地で日本語や日本文化を普及させる宣伝活動を効果的に行うため、東方社は作曲家村井邦彦の息子で、気鋭の映像作家としても高く評価された。

ラマーは夏に来日してフジロックフェスティバルで圧巻のステージを見せた。

ジャズの革新者ロバート・グラスパーが新バンドを率いて東京JAZZに初登場し、ヒップホップやR&Bなどを吸収した最先端の演奏を披露した。

シャルル・アズナブール、アレサ・フランクリン、西城秀樹。各ジャンルを代表する名歌手が逝ったことも時代の節目を感じさせた。

（編集委員 吉田俊宏、岩崎貴行）

---

涌夕紫てにナタリー・シ

ヒップホップから日本のクビデオを監督したヒロ・ムライは作曲家村井邦彦の息子で、気鋭の映像作家としても高く評価された。

ラマーは夏に来日してフジロックフェスティバルで圧巻のステージを見せた。

ジャズの革新者ロバート・グラスパーが新バンドを率いて東京JAZZに初登場し、ヒップホップやR&Bなどを吸収した最先端の演奏を披露した。

シャルル・アズナブール、アレサ・フランクリン、西城秀樹。各ジャンルを代表する名歌手が逝ったことも時代の節目を感じさせた。

（編集委員 吉田俊宏、岩崎貴行）

チルやポスターとともに「日本語を学ぼう」と題したポスターが貼られている。「スズメ」「ハト」などの日本語が並ぶが、人々は映画の写真ばかり見ている。

□□□

**歴史の断片を拾う**

日本国内の写真にもアジアの人々がたくさん写っている。陸軍士官学校のビルマ（現・ミャンマー）人留学生は笑顔だが、神奈川県警察練習所の留学生は口をつぐみ、どこか所在なげだ。隣の日本人警察官が大きな口を開けて何かを唱和する姿とは対照的である。

これまでの調査の結果を今年『秘蔵写真200枚でたどるアジア・太平洋戦争』（みずき書林）という一冊にまとめることができた。

東方社の写真は日本と大東亜共栄圏に組み込まれた地域との関係に再び光を当て、忘却の淵にある歴史の断片を拾い上げるきっかけになる。関係者の元に眠る写真は、まだあるのかもしれない。

（いのうえ・ゆうこ＝政治経済研究所主任研究員、日本映画のス

---

ーム「青い鳥」徳広 英之

高校時代、長距離走に青春をかけた。地元の京都では毎年、陸上競技部が集まる高体連の合宿がある。兵庫の鉢伏高原で朝から晩まで50キロ以上走った。宿は「青い鳥」というロッジ。強豪・洛南高校駅伝チームのエースだった高岡寿成くんもいた。競技力は雲泥の差で、もちろん高岡くんは私を知らない。年も1つ下。彼は龍谷大学、カネボウ化粧品へと進んだ。2002年のシカゴマラソンで打ち立てた日本記録は16年間破られなかった。そんな遠い存在との縁をつないだのが、青い鳥だ。

40歳を過ぎ、同郷の仲間と駅伝チーム「ぶ

---

日本経済新聞　12 月 3 日付

井上 祐子編著

## 秘蔵写真200枚でたどるアジア・太平洋戦争

東方社が写した日本と大東亜共栄圏

本書副題は「東方社が写した日本と大東亜共栄圏」。国内編、東南アジア編、中国編として、国内の陸戦部隊と航空、近代都市東京の街と人々、そして、マラヤ・シンガポール、フィリピン、インドネシア、ビルマ（現・ミャンマー）北、北京などアジア各地の社会や日本軍の動きを、すべて初公開の写真群で詳細に追う。

イギリス支配の終焉を象徴する「ラッフルズ像の撤去作業」（シンガポール、一九四二年）、現地住民によるさまざまな「竹槍訓練」（マニラ、一九四三年）、救護系と救災系を分担する「北京聖心女子中学校の防空訓練」（一九四三年）など、二〇〇枚で現地の様相をたどる。

一枚ごとの内容を文字化し社会背景や戦況を解説するのは、視覚メディア史が専門の井上祐子氏。細部を見逃さずに写真の読み方を示す本書は、戦中の日本や

## 初公開、二〇〇枚の写真群

細部を見逃さず写真の読み方を示す

白山 眞理

アジアを学ぶ資料集としても学生にも薦めたい。

ところで、大東亜共栄圏で取材をしていた新聞社や通信社の写真は、敗戦前後にネガフィルムごと焼却処分されたものが多い。本書の写真は、なぜ今必死って




B5判・224頁・3400円
みずき書林
978-4-909710-03-1
TEL. 090-5317-9209

いたのだろう。

東方社は、陸軍参謀本部のプロパガンダグラフ誌制作の意向を受けて一九四一年に設立された民間の写真制作会社だ。翌年からグラフ誌『FRONT』を不定期刊行していたが、戦後すぐに改組改称して文化社となり、数年後に解散した。専門の井上祐子氏。細部を見逃さずに写真の読み方を示す本書は、戦中の日本や

数の撮影者に渡されていたが、撮影された者の記録として、撮影された者の記録や、雑誌などで連絡不能だった人々、社命で撮影したというアルバム」などもあって、資料性を高めている。

さて、写真解説の中には、同じカットが『FRONT』や内閣情報部創刊の『写真週報』に使われているという記述が散見される。

ガフィルムがあったのだ。

東方社時代のネガフィルムが焼却されなかったのは、懸命に撮影された大切なものという認識があったからだ。文化社解散後、複

族が二〇一〇年に公益財団法人政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センターにネガフィルムを寄贈された。本書コラムには、こうした来歴のほかに、東方社時代のネガフィルムを社屋もろとも処分するとは、体制と結びついて仕事をしていた組織の末路を象徴するエピソードだ。

曲折を経て、青山氏の親に二万七千五百コマものネ

同じ写真がどのように扱われたのか、プロパガンダでの使用例をもっと見たかった。

また、本書の写真には、NHKが共同研究で作成したネガフィルムのデジタルデータが使われている。ネガフィルムはプリント技術で諧調を整えて初めて「写真」になることを思えば、残念な画像だ。

デザインも諧調の整えもない硬い画像は、写真美に酔えない。しかし、写された内容とその背景に注目して真をめくり続けると、東方社と戦時体制の蜜月ぶりが浮かび上がってくる。捨てられた秘蔵写真は、同社が文化人の隠れ里だったという「神話」が迎合の言い訳にすぎなかったことを証している。（しらやま・まり＝一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）

★いのうえ・ゆうこ＝京都外国語大学非常勤講師、公益財団法人政治経済研究所主任研究員。専門は近現代日本の視覚メディア史。著書に「戦時グラフ雑誌の宣伝戦」「日清・日露戦争と写真報道」など。一九六二年生。

週刊読書人　10 月 5 日付

---

出版情報

●『秘蔵写真200枚でたどるアジア・太平洋戦争』 井上祐子編著、みずき書林発行。陸軍参謀本部傘下で、グラフ雑誌など対外向けの写真宣伝物を制作していた東方社のカメラマンが撮影した写真を中心に、戦時期の内外の動きを伝える。①国内編②東南アジア編③中国編、の三部構成。飛行訓練や軍事演習をはじめ、大東亜文学者大会、占領地の学校や捕虜、空襲被害など、多様な写真が並ぶ。二三〇ページ、三六七二円。

東京新聞朝刊　8 月 12 日付